〔研究会報告〕

JJRS 創刊 50 周年記念シンポジウム
――日本宗教研究の過去・現在・未来

ケイトリン・ユゴレツ

Kaitlyn Ugoretz

2023 年、南山宗教文化研究所（NIRC）は、*The Japanese Journal of Religious Studies*（*JJRS*）創刊 50 周年を記念して、「日本宗教研究の過去・現在・未来――*The Japanese Journal of Religious Studies* 創刊 50 年」と題した盛大なシンポジウムを開催した。6 月 9 日と 10 日の両日、世界各国から NIRC と *JJRS* の研究者や友人が集い、創刊からの歴史、日本宗教研究の近年の展開、そしてこの分野の将来について考えた。

JJRS の創刊号は、1974 年 3 月、*Contemporary Religions in Japan* の後続誌として刊行された。国際宗教研究所の David Reid は、戦後日本の宗教研究を推進するうえで、本誌が主導的な役割を果たす潜在性を秘めていることを見抜き、掲載される研究の多彩さを示すために誌名を変更した。同誌の管理運営は 1981 年に NIRC に移管され、現在に至っている。

数え切れないほどの人々が、本誌の航路を描くために夜遅くまで尽力してきた。50 周年記念行事には、元編集長の Paul Swanson、長年の顧問である林淳と Jim Heisig、元副編集長の Clark Chilson、現編集長の Matthew D. McMullen など、これらの功労者の多くが参加した。元編集員で現南山大学学長の Robert J. Kisala は、日程の都合がつかなかったにもかかわらず祝辞を贈り、気持ちのうえで出席した。さらに会場には、これまでの客員編集者、編集コンサルタント、*JJRS* の執筆者が詰めかけた。

今日、*JJRS* が最先端の学術成果を先導するというレガシーを受け継いでいることを誇りに思う。内容や射程の面で、本誌は日本における宗教研究の学際的なアプローチを提唱してきた。そして刊行物の面では、オープンアクセスの先駆者であり、現在では近年リニューアルした NIRC ウェブサイトでデジタル版をダウンロードできるほか、オンデマンド印刷される紙媒体として世界中で流通している。

シンポジウム初日の幕開けは、本誌の歴史における数多くの節目に焦点を当てた、元

編集長の Paul Swanson と林淳の発表であった。この回顧談は、多くの人々に、日本宗教という研究分野を発展させる一助となった学術的な論争や進展を魅力的かつノスタルジックに垣間見せた。講演の最後に、林氏は黄金のバトンを披露し、大きな拍手のなか、Swanson 氏とともに厳かに McMullen 氏に手渡した。その午後には、Clark Chilson（ピッツバーグ大学）・星野靖二（國學院大學）・Keller Kimbrough（コロラド大学）・Jacqueline Stone（プリンストン大学名誉教授）で、パネルディスカッション「日本宗教の研究について」がおこなわれた。ディスカッションのテーマは、*JJRS* が自らのキャリアや日本宗教の分野にいかなるインパクトを与えたか、日本宗教という分野の現状を踏まえ、いかなる研究上の可能性や課題があるか、日本宗教の研究にいかなる展望を描いているかなど、多岐にわたった。パネリストのコメントを受けて、会場全体で活発な議論が交わされた。

シンポジウム 2 日目は、日本宗教の分野における挑戦的研究を企図したいくつかの発表に焦点が当てられた。午前中は、Emi Foulk Bushelle（ウェスタン・ワシントン大学）が、「国学および日本文献学の仏教的起源」というテーマで発表をおこなった。Bushelle 氏は、17 世紀の真言僧である浄厳と契沖、彼らの「失われた」仏教真理を言語から再発見する試みまでさかのぼり、本居宣長に代表される文献学を考察した。Orion Klautau（東北大学）は、「近代日本における公共的仏教研究の歴史について」という自身の研究を共有した。Klautau 氏は、東京大学における初期の日本の学術的仏教研究と、大乗仏教をめぐる国を超えた言説が、仏教が「文明化された」日本国家の建設にどう貢献し得るかという問いに、いかにして応えようとしていたかを跡づけた。

午後のセッションは、Jolyon Baraka Thomas（ペンシルバニア大学）と Aike Rots（オスロ大学）による発表であった。Thomas 氏は、「教育政策関係者としての宗教学者と戦後日本における教育政策の宗教的側面」と題された発表で、戦後日本における教育政策の立案において宗教学者が果たした役割と、宗教教育に対する論争が、公共的な必要性よりも分野的・国家的・経済的利益を反映することがいかに多いかという点に関して批判を加えた。Rots 氏は「越境――アジア人新世における「日本宗教」研究の再考」で、宗教学の現在と未来に関して、「方法論的ナショナリズム」と日本創生プロジェクトを批判し、環境人文学や人間以上（more-than-human）の関係に光を当てる事例研究とともに、アジアの人新世における超国家的で場所基準の儀式比較を支持するという議論を展開した。

JJRS 50 周年は今や過去となったが、当日の内容は、行事に参加できなかった現在および未来の研究者にも引き続き公開されている。シンポジウム全体は、ヴァン・ブラフト奨励研究員・石原和の技術協力と、同研究員・末村正代の後方支援によって収録された。新編集員の Kaitlyn Ugoretz は、プログラムの進行状況をソーシャルメディアに投稿することで行事へのオンライン・アクセスを可能にし、後日発表映像を編集し、

NIRC の新しい YouTube チャンネル（@NIRC-nanzan）にアップロードした。「いいね」とチャンネル登録をお願いいたします！最後に、編集者と登壇者は現在、この重要な行事から得られた知見の結晶化を確約する、記念すべき *JJRS* 50 周年特集号を準備中である。*JJRS* のこれまでの 50 年に、そして来たるべき 50 年に乾杯！

（訳：末村正代）

1 日目：6 月 9 日（金）13:30 ～ 17:30

発表

Paul Swanson（南山宗教文化研究所名誉教授）

“Fifty years of the JJRS”［*JJRS* の 50 年］

林　淳（愛知学院大学、NIRC）

“The JJRS and the Study of Japanese Religions”［*JJRS* と日本宗教の研究］

パネルディスカッション

“On the Study of Japanese Religions”［日本宗教の研究について］

Clark Chilson（ピッツバーグ大学）

星野靖二（國學院大學）

Keller Kimbrough（コロラド大学）

Jacqueline Stone（プリンストン大学名誉教授）

2 日目：6 月 10 日（土）9:00 ～ 17:00

“Research on the Study of Japanese Religions”［日本宗教の分野における研究］

午前

Emi Foulk Bushelle（ウェスタン・ワシントン大学）

“National Learning and the Buddhist Roots of Japanese Philology”［国学および日本文献学の仏教的起源］

Orion Klautau（東北大学）

“Towards a History of the Public Study of Buddhism in Modern Japan”［近代日本における公共的仏教研究の歴史について］

午後

Jolyon Thomas（ペンシルバニア大学）

“Scholars of Religion as Educational Policy Actors and Religious Aspects of Education Policy in Postwar Japan”［教育政策関係者としての宗教学者と戦後日本における教育政策の宗教的側面］

Aike Rots（オスロ大学）

“Crossing Boundaries: Rethinking the Study of ‘Japanese Religion’ in the Asian Anthropocene”［越境――アジア人新世における「日本宗教」研究の再考］